

新図書館整備基本構想

令和8年5月

能勢町

1	「新図書館整備基本構想」策定の趣旨	1
	(1) 施設の老朽化と機能的制約	1
	(2) 社会情勢の変化と新たな町民ニーズ	1
	(3) 「図書室」から「図書館」へ	1
	(4) 本構想策定の趣旨	2
2	上位関連計画	3
	(1) 第6次能勢町総合計画	3
	(2) 能勢町教育大綱	3
	(3) 能勢町都市計画マスタープラン	5
	(4) 能勢町公共施設等総合管理計画	5
	(5) 旧庁舎周辺整備基本計画	6
	(6) 新たな生涯学習センター整備に関する検討書	7
	(7) 図書館が拓く未来の学びと地域社会	8
3	基本構想策定に向けたプロセス	10
	(1) 町民参加型プロセス「のせのセッション」の展開と有効性	10
	(2) ワークショップの概要	11
	(3) ワークショップを通じて描かれた「新しい図書館で実現したい素敵な情景」	13
	(4) 「情景」から読み取れる価値観と課題	18
	(5) ワークショップから導かれる本町の構造	18
4	ステークホルダーの声と社会ニーズの構造化	20
	(1) 専門家・クリエイターによる先進的知見	20
	(2) 教育・図書館実務者による専門的視点	20
	(3) 地域・福祉・健康の視点	20
	(4) 地域産業・青年部・移住者の視点	21
	(5) ステークホルダーが描く共通の図書館像	21
5	町の課題（ほころび）の整理	22
6	基本理念と基本方針	23
	(1) 基本理念	23
	(2) 基本方針	23
7	今後の進め方	28
	(1) 事業スケジュール	28
	(2) 「のせのセッション」の継続的实施	28
	(3) 検討プロセスの可視化と持続的な利用環境の醸成	28

1 「新図書館整備基本構想」策定の趣旨

(1) 施設の老朽化と機能的制約

能勢町生涯学習センターは、昭和 50 年に竣工した旧大阪府森林組合豊能支店の建物を改修し、平成 21 年 7 月に開設された、図書室や会議室等から構成される施設である。

しかし、竣工から約 50 年が経過し、施設の老朽化が著しい状況にある。現在の施設は、旧耐震基準で建てられており、耐震性が不足しているだけでなく、延床面積も約 506 m²と機能的な制約が大きい。

そのため、町民からは「本が少ない」「閲覧席が足りない」「駐車場が 1 台分しかない」といった不満の声も寄せられており、車いす利用への配慮などバリアフリー対応も不十分であるなど、ハード・ソフトの両面で、現施設では十分な対応が困難な状況にある。

(2) 社会情勢の変化と新たな町民ニーズ

少子高齢化の進行やデジタル化の進展により、公共施設に求められる役割は複雑化している。

第 6 次能勢町総合計画においては、2045 年には、町の人口が約 4,000 人規模まで減少し、高齢化率が約 7 割に達すると予測されており、かつての地縁的な関わりやふれあいの機会が減少し、地域コミュニティを支えてきた地縁力も低下しつつある。

このような社会変化、人口減少、地域コミュニティの衰退という現実に直面する中で、従来の「図書室」の枠組みを越えた、町民の学び・出会い・地域の誇りを支える「知と交流の拠点」や、全世代が集い互いに支え合える「サードプレイス」となるような、新たな拠点として整備することが求められている。

(3) 「図書室」から「図書館」へ

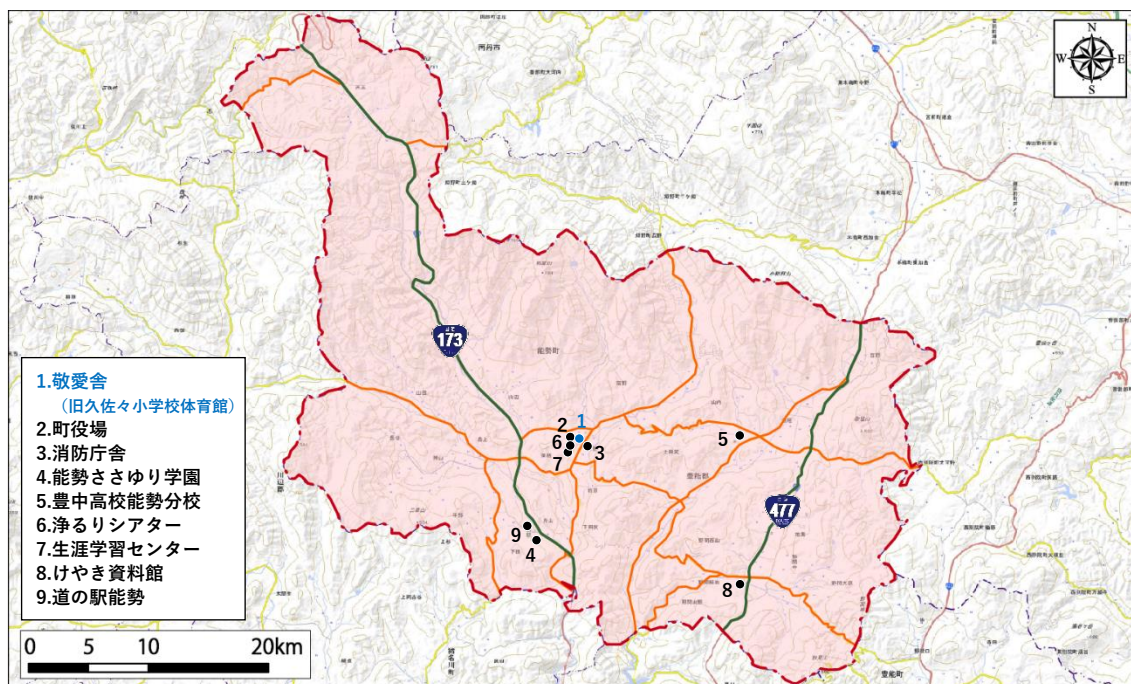
新図書館整備基本構想（以下、「本構想」という。）の目的は、既存の「図書室」から図書館法に基づく正式な「図書館」へと移行し、教育および文化の向上に資する拠点として再定義することにある。

新しい生涯学習センター（図書館）（以下、「本施設」という。）は、閉校となった旧能勢町立久佐々小学校の体育館（以下、「敬愛舎」という。）をコンバージョンして活用するものとする。

新設ではなく既存施設である敬愛舎を再生・活用する選択は、財政負担の軽減や環境負荷の低減（SDGs への寄与）といった機能的側面のみならず、本町の歴史的資産を次世代に継承するというまちづくりの方針を象徴するものである。

敬愛舎という名称が 100 年以上にわたり地域で親しまれてきた背景を踏まえ、本プロジェクトでは既存建築物の持つ歴史的価値を再評価し、これを核とした拠点整備を行う。

単なる利便性の追求（機能の優先）にとどまらず、本町のアイデンティティを体現する空間として再生（価値の優先）させることで、本町が大切にする「文化・精神の継承」を具現化する。



図：位置図 (scale 1/110000)



写真：敬愛舎（旧久々小学校体育館）

位置：大阪府豊能郡能勢町宿野 866 番地
 構造・規模：鉄筋コンクリート造一部鉄骨造・2階建て
 主要用途：[建築基準法]体育館
 [消防法]7項
 [バリアフリー法]特別特定建築物（小学校）

建築面積：1,226.50 m²
 延べ面積：1,324.77 m²
 基礎：直接基礎（柱状改良）
 最高高さ：12.40m
 最高軒高さ：9.30m

（４）本構想策定の趣旨

能勢町（以下、「本町」という。）では、人口減少や高齢化の進行、社会構造の変化に伴い、地域社会を支えてきた様々な関係性が弱まりつつある。これらは単なる人口や施設の問題ではなく、人と人、世代、地域の内外、自然と暮らし、時間の過ごし方といった「つながりのほころび」として顕在化している。

本構想は、このような状況を背景に、失われつつある関係性を再び結び直し、新たな価値とつながりを創出する拠点として、生涯学習センター（図書館）を位置付けるものである。

すなわち、本施設は単なる公共施設の整備ではなく、本町の将来像である「縁をつなぐ開かれたまち」を具体化するための実践の場であり、本町が将来に向けて何を大切にし、どのようなまちをめざすのかを可視化する「未来への投資」としての性格を有するものである。

本構想は、図書館整備を契機としたまちづくりの指針として、町民との共創プロセスを重視しつつ、合理的かつ効果的な施設のあり方を示すものである。

2 上位関連計画

(1) 第6次能勢町総合計画

／能勢町（令和4年7月）

総合計画は、本町のまちづくりの指針となる最上位計画である。人口減少や少子高齢化、IT社会の進展といった社会情勢の変化に対応し、持続可能な地域社会を築くための「道しるべ」としての役割を担う。

特に「SDGs」を地方創生の原動力として位置付け、環境・経済・社会が統合的に向上する自律的な「里山未来都市」の実現をめざすための行政運営の根拠となるものである。

① 将来目標

「人・地域・地球の健康を守り 縁をつなぐ 開かれたまち能勢 ～里山未来都市～」を将来目標に定め、地域内外の「縁（つながり）」を創造し、増やしていくことで、支え合いの輪を広げ、温かさや賑わいのある開かれたまちをめざす。豊かな自然や人間関係を健康長寿の礎とし、食料やエネルギーの自給率向上を図りつつ、里山資源を循環利用する持続可能なモデルの構築を掲げている。

② 7つのテーマ

10年後の能勢をどのような町にしたいか、町民の課題や思いを共有して作成された「共通の願い」として、審議会が現地で活動者の声を聞き議論を重ね、以下の7つのテーマが策定された。これらは、町民・事業者・行政が同じ方向をめざすための指標となる。

- ・地域社会の創り手を育むまち
- ・人の輪が広がるまち
- ・健康で生きがいをもてるまち
- ・里山を守り・生かすまち
- ・働く場所が多様にあるまち
- ・安心して移動ができるまち
- ・地域エネルギーで自立するまち

③ 生涯活躍できる社会の実現

生涯学習の推進方策として、「人生100年時代」や「Society 5.0」の到来を見据え、一人ひとりが生涯を通じて学び、その成果を社会に生かせる環境を整備する。

具体的には、個人の価値観や関心に基づき、生涯にわたって自由に学べる場の確保や、学習に関する相談・情報提供の体制を充実させる。また、「生涯学習人材バンク」の登録者を講師やボランティアとして活用し、町民が主体となる学びを促進していく。

デジタル化の推進においては、オンライン技術を有効活用して生涯学習に参加できる層の裾野を広げるとともに、高齢者等の情報格差（デジタル・ディバイド）解消に向けた学習機会を強化する。さらに、高齢者の豊かな知識や経験を次世代へ継承し、学びを地域活動や生きがいづくりへとつなげる仕組みを構築していく。

(2) 能勢町教育大綱

／能勢町（令和8年3月）

能勢町教育大綱は、教育基本法および地方教育行政の組織及び運営に関する法律に基づき、本町の教育、学術、文化の振興に関する総合的な施策の方向性を示すものである。本町の最上位計画である「能勢町第6次総合計画」が掲げる「里山未来都市」のビジョンを教育分野において具現化するための戦略計画としての役割を担う。

① 基本理念

『知と交流』で未来を拓き、一人ひとりのウェルビーイングを実現する、グローバルな学びのまち・能勢」を基本理念に掲げている。地域の豊かな自然や歴史を学びのフィールドとして活用し、多様な主体との交流を通じて、能勢への誇りと愛着を持ち、持続可能な社会の創り手となる人材の育成をめざしている。

② 重点施策と具体的取組

【確かな学力の定着と、教育 DX による学びの革新】

- ・個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実：ICT を高度に活用し、子どもの習熟度に応じた「個別最適な学び」と、多様な他者と対話する「協働的な学び」を両立させる。
- ・認知機能に着目した「基礎読解力」の底上げ：問いを立て、複雑な情報を正しく理解・分析し、自らの考えを論理的に構築する力を育成する。
- ・教育 DX の推進と校務の効率化：クラウド活用等により「校務 DX」を推進し、教職員の働き方改革を実現し、教員が子ども一人ひとりと向き合う時間を最大化する。

【「持続可能な社会」を担う、12 年間の能勢地域連携・一貫教育】

- ・ESD（持続可能な開発の教育）の推進：能勢の豊かな自然資本を活用し、環境保全や持続可能な社会（SDGs）を自分事として捉える探究学習を推進する。
- ・能勢課題探究の深化：産学官が連携し、職場体験に留まらず、地域の課題を中高生がビジネスやテクノロジーの視点も交えて解決策を練る、実践的なキャリア教育を展開する。
- ・デジタルとリアルベストミックス：デジタル教材を積極的に活用しつつ、能勢分校等との連携による農業体験や英語交流など、リアルな体験（身体的・五感的体験）の価値を重視し、豊かな人間性を育む。

【ウェルビーイングを支える「教育と福祉」の包括支援】

- ・誰一人取り残さないセーフティネットの強化：「能勢・福祉・教育プラットフォーム」を基軸に、経済的困難、不登校、虐待等の課題に組織的に対応し、子どもの安心・安全を保障する。
- ・特別支援教育の質的担保：必要な専門職の配置と全教員の専門性向上を図り、インクルーシブな教育環境を深化させる。

【生涯学習の拠点化と関係人口の創出】

- ・新生涯学習センター（図書館）の整備：旧久佐々小学校体育館を活用し、単なる施設を超えた「知と交流の拠点」として、多世代が集い、地域の知的資産を守る場を創出する。
- ・関係人口を巻き込むコミュニティの活性化：町外利用者も含めた「学びのコミュニティ」を構築し、地域文化の継承と、町全体の活性化につなげる。

(3) 能勢町都市計画マスタープラン

／能勢町（令和 6 年 7 月改定）

都市計画マスタープランは、都市計画法第 18 条の 2 に基づき、町の都市計画の基本方針を定めるものである。第 6 次能勢町総合計画および北部大阪都市計画区域マスタープランに基づき、これら上位計画の将来ビジョンを土地利用や施設配置といった空間面から具体化する役割を担う。また、将来像「里山未来都市」の実現に向けた指針として、用途地域や地区計画等の土地利用規制や、道路・河川などの都市施設整備を誘導するものである。

① 基本目標

「豊かな自然環境や歴史・文化、整備されてきた都市インフラ等を守り活かしながら、新たな挑戦により築く『里山未来都市』」を基本目標に定め、美しい里山環境を保全・継承しつつ、人口減少や少子高齢化といった社会情勢の変化に「挑戦」することで、人々が里山の恩恵を享受しながら共生できる未来の構築がめざされている。

② 基本方針

基本目標の実現に向け、以下の 4 つの方針が定められている。

- ・方針 1：豊かな自然や文化の中で快適に暮らせるまちづくり
- ・方針 2：産業振興を図るまちづくり
- ・方針 3：生活に必要な基盤が整ったまちづくり
- ・方針 4：災害に強い安全・安心なまちづくり

③ 都市施設整備の方針

公共施設に対する基本的な考え方として、これまで整備してきた公共施設については適切に維持管理を図るとともに、公共施設跡地や旧公共施設の最適化を図る。

特に旧役場庁舎跡地については、「旧庁舎周辺整備基本計画」において役場周辺をシビックゾーンとして位置付けており、これに基づき広場や生涯学習施設の一体的整備を行う。

(4) 能勢町公共施設等総合管理計画

／能勢町（令和 4 年 3 月改定）

公共施設等総合管理計画は、人口減少や施設の老朽化、厳しい財政状況を背景に、将来の町民負担を軽減しつつ行政サービスを維持することを目的とした指針である。本町の最上位計画である「能勢町総合計画」を公共施設等の適正管理・有効活用の面から支え、各施設類型別の個別施設計画の指針としての役割を担う。長期的視点に基づき、更新、統合・廃止、複合化等を計画的に行うことで、施設配置の最適化と財政負担の平準化をめざすものである。

① 公共施設等の総合的かつ計画的な管理に関する基本的な方針

持続可能なまちづくりに向け、公共施設等のマネジメントを推進する。

まず、安全確保と長寿命化を重視し、事後保全から点検に基づく予防保全へ転換することで、施設の延命と投資的経費の抑制・平準化を図る。

次に、社会ニーズへの対応と保有総量の適正化を進める。老朽化や耐震化に対応しつつ、施設の統

合・複合化（多機能化）を推進し、サービス水準を維持しながら総量を削減する。目標として、町民一人当たりの延床面積を大阪府内町村平均と同等まで引き下げる（現況から約 40%減、約 40,000 m²）ことを掲げる。

② 生涯学習センターの管理に関する基本的方針

生涯学習センターは、築後 40 年以上が経過しており、今後、大規模改修が必要となってくることから、集約化に向けた検討を行う。

（５）旧庁舎周辺整備基本計画

／能勢町（令和 5 年 3 月）

旧庁舎周辺整備基本計画は、本庁舎及び消防庁舎の整備に伴い、周辺に位置する浄るりシアター、生涯学習センター、敬愛舎、来庁者及び職員駐車場等との調和を図るものである。

あわせて、総合管理計画の方針を踏まえ、旧庁舎跡地を有効活用し、公共施設の再編・集約化・機能移転に加え長寿命化を図ることで、町民福祉の向上に資する周辺整備を行うものである。

① シビックゾーン整備のコンセプト

能勢町の「シビックゾーン」整備におけるコンセプトは「結びの場」と定義する。役場庁舎、浄るりシアター、生涯学習施設（図書館）、広場等が集積する本エリアを、町民・短期滞在者・移住希望者などが交流し、集い、学ぶ拠点として位置付ける。

② シビックゾーンの機能

シビックゾーンにおいては、公共が担うべき機能として、防災関連機能やワンストップサービス窓口を位置付ける。また、既存機能を踏まえ、図書の閲覧・貸出機能や浄瑠璃・舞台芸術の制作・鑑賞機能についても、当該ゾーンに立地することが望ましい。

一方、アクティビティ拠点、古民家改修宿泊、農業塾、テレワーク、ワーケーション等の来訪者向け機能は、主として民間による整備を想定する。ただし、シビックゾーンは来訪者が集い交流する拠点であることから、情報交換やワークショップ等の機能を備える場としての整備を図る。

③ 配置イメージ

生涯学習施設は敬愛舎を活用し、憩いの広場の面積を広く確保する。平日は広場中心部を運動やウォーキング等に利用し、休日はマルシェやステージイベント、キッチンカーの出店等を行う場として活用する。

また、広場周縁部の段差を活用し、イベント時の客席として利用する計画とする。

一方で、生涯学習施設と広場には距離が生じるため、両者を一体的に利用するための動線や仕掛けの工夫が必要である。

④ 敬愛舎活用イメージ

中央部のアリーナは、図書室を中心に、談話、展示、ワークショップの各スペースとして活用する。多目的室は庁内利用の会議室、ステージはプレイルーム、2 階ギャラリーはメンテナンススペースへと用途変更する。

建築基準法上、体育館の床耐荷重は図書室に求められる水準より小さいため、そのまま転用する

と耐荷重不足が懸念される。このため、図書室の面積を拡張し図書を分散配置することで、単位面積当たりの荷重を低減する計画とする。

また、水回りの位置変更は改修費の増大につながるため、便所の位置は既存配置を踏襲する。さらに、用途変更に伴い排煙計画の検討が必要となる。

図書室を施設中央部に配置することで、玄関ホール、プレイルーム、談話・展示・ワークショップスペースとの一体的利用を促し、効率的な運営を可能とする。

一方、アリーナの大空間は天井が高く、図書室としては落ち着きに欠けるうえ空調負荷も大きいことから、膜天井を設けて天井高さを 5～10m 程度まで下げること検討する。膜天井は特定天井に該当しないよう、取付金物を含め 2kg/m²以下の軽量仕様とし、地震時の安全性に配慮する。

なお、既存床は木造下地であるため、重量のある書架や展示物による集中荷重で沈み込みが生じるおそれがある。このため、必要な耐荷重を確保できるよう床の補強・改修を行う。

(6) 新たな生涯学習センター整備に関する検討書

／能勢町教育委員会（令和 6 年 8 月）

新たな生涯学習センター整備に関する検討書は、現施設の深刻な課題を整理し、敬愛舎をコンバージョンして整備する新施設のめざすべき姿をまとめたものである。

① 現状と背景

現生涯学習センターは、昭和 50 年竣工の旧大阪府森林組合豊能支店を改修し、平成 21 年に開設された施設である。開設以来、町民に寄り添ったサービスを提供してきたが、竣工から約 50 年が経過して老朽化が著しく、旧耐震基準であることも大きな課題となっている。施設面積は約 506 m²と狭小で、閲覧席は 10 席、駐車場は 1 台分しかなく、収蔵スペースの不足やバリアフリー対応の遅れも深刻である。

こうした中、公共施設の再編・集約化をめざす「旧庁舎周辺整備基本計画」に基づき、敬愛舎をコンバージョンして新施設を整備する方針が固まった。

② 現状の課題

検討書では、現施設の課題を以下の 3 点に整理している。

- ・利便性とアクセス：駐車場不足により前面道路の混雑や安全上の支障が生じている。また、広大な町域に対して公共交通機関が少なく、来館手段の確保が困難な地域が存在する。
- ・整備機能の不足：建物構造上、受付から室内全体を見渡せず保安上の問題がある。また、書庫やレファレンススペース、司書の作業空間が欠如しており、静かな環境と交流の場のゾーニングもなされていない。バリアフリー化が十分図られていないことに加え、手洗いスペースも不足している。
- ・サービスの提供：図書購入予算やスペースの制約から資料の更新が滞っており、デジタル化への対応も不十分である。また、高度化する町民ニーズに対応できる専門職員の確保も求められている。

③ 基本理念と整備方針

新施設は、「生涯をつうじて楽しく学び・憩い・交流することができる地域コミュニティ拠点」を基本理念に掲げる。この理念のもと、以下の 3 つの機能を柱とする。

- ・学習支援サービス機能の充実：学習に集中できるスペースや、オンライン会議や授業を受けることのできる設備の充実や、子育て世代も気兼ねなく利用できるスペースの充実など、利用価値の高い図書環境や学習環境の構築。
- ・多様な世代の交流機能の充実：町民が自発的に集い、地縁力を補完できるスペースの創出。
- ・資料室機能の充実：文化財、自然史、旧町立小中学校で受け継がれてきた地域資料の収集・保存・展示の充実や、地域振興や観光など、多様な魅力の発信。

④ 改修コンセプト

新生涯学習センターは、既存ストックの有効活用により後年度の負担軽減を図りつつ、能勢町の「知と交流のハブ」として、持続可能な施設運営とサービスの拡充をめざすものである。具体的な整備に向けて、以下の7つのコンセプトが設定されている。

- ・蔵書数の拡充による図書サービスの向上：町民一人当たり蔵書数を現在の3.93冊から5冊以上に増やし、デジタル活用も進める。
- ・豊かな地域資料の保管・展示：町の歴史・文化を学び、魅力を発信する場とする。
- ・郷土愛の醸成と次世代を担う人材の育成：郷土愛を醸成し、学習成果を次世代へ引き継ぐ仕組みを推進する。
- ・子育て世代の利用にも配慮した空間の創出：乳幼児専用スペースを設け、保護者が安心して利用できる環境を整える。
- ・気軽に利用できるスペースの充実：カフェや座談スペースなど、気軽に立ち寄れる居場所づくりを行う。
- ・学習習慣の形成への支援：児童生徒が放課後や休日に自習できる場を提供する。
- ・新たな利用者の確保：地域ニーズに沿ったイベントを積極的に開催し、交流を促進する。

(7) 図書館が拓く未来の学びと地域社会

／文部科学省 図書館・学校図書館の運営の充実に関する有識者会議（令和8年3月）

文部科学省では、図書館・学校図書館の現状や課題を把握・分析し、運営の充実に向けた検討を行うため、「図書館・学校図書館の運営の充実に関する有識者会議」を設置し、令和6年12月より10回にわたり議論を進めてきた。

図書館が拓く未来の学びと地域社会報告書は、公共図書館と学校図書館を総称して「図書館」と位置づけ、双方が一体となって未来の学びと地域社会を拓くための指針を示している。

① めざすべきビジョン：「新たな地域共創」の拠点

図書館は、従来の資料提供機能に加え、「読む」×「集う」×「学ぶ」という機能を総合的に展開することで、「新たな地域共創」を担う場へと進化することが求められている。単なる本の貸出所に留まらず、人々が集い、新たな活動や価値が生み出されることで、地域の活力向上と持続可能な地方創生に寄与する「地域のハブ」をめざすべきとしている。

② 求められる具体的な機能と役割

サードプレイス機能として、住民が立ち寄りやすく、居心地良く滞在できる場としての機能を重視する。多様な閲覧スペースや個人学習スペースに加え、協働的な学びを促す「グループ学習スペース

ス」や「コラーニングスペース」の充実が求められている。

偽・誤情報の拡散という社会的課題に対し、信頼できる情報を提供し、住民のメディア情報リテラシー向上を支援する「地域の知の拠点」としての役割が喫緊の課題となっている。

ものづくりや実験が行える「メーカースペース」やスタジオの設置など、住民の表現や創造を支える機能の導入により、創造的活動の支援を行うことが期待されている。

③ ユニバーサルアクセスの実現

障害の有無や居住地域にかかわらず、全ての人がサービスを享受できる「ユニバーサルアクセス」の構築を柱としている。

電子書籍サービスやデジタルアーカイブの導入による ICT・デジタル化の推進により、来館困難者や中山間地域の住民への情報提供、および運営の効率化を図る。

「読書バリアフリー法」に基づき、視覚障害者等だけでなく、高齢者、外国人、入院患者など多様なニーズに合わせた資料（点字、大活字本、音声図書等）の提供体制を強化する。

④ 図書館と学校図書館との連携

ICT を活用した電子書籍の共同利用やデジタルアーカイブ共有など、広域連携による新たな価値創出が期待される。

また、ユニバーサルアクセス実現には両館の連携と多職種協働が不可欠である。

さらに、公共図書館の知見を学校へ還元し、個別最適・探究的な学びを支援する必要がある。そのため、連絡会等の定例化による組織的連携体制の構築が求められる。

⑤ 地域の連携・協働

地域の書店、出版社、学校、福祉部局、さらには民間団体等と恒常的に連携し、「ハブ」として、地域課題を解決するためのネットワークを構築する。

司書等の専門職は、資料整理のみならず、地域における「ファシリテーター」として、人と情報、人と人を繋ぎ、地域共創を牽引する役割が求められる。

3 基本構想策定に向けたプロセス

(1) 町民参加型プロセス「のせのセッション」の展開と有効性

「のせのセッション」とは、敬愛舎を新たな生涯学習センター（図書館）としてコンバージョンするにあたり、町民の想いを「のせ」、未来を「対話（セッション）」しながら共につくる町民参画のプロセスであり、単なる「ハコモノづくり」ではなく、「まちづくりの再定義」をめざすものである。

従来の行政主導で計画された公共施設は、完成後に町民の真のニーズと乖離してしまうケースが少なくない。本施設においては、単なる「行政の施設」ではなく、町民自身が「自分たちの施設」であるという当事者意識を強く持ち、親しみを感じられる拠点をめざす。

そのため、構想段階から町民と共に創るプロセスを導入し、施設との永続的な関わりを築くことを目的とする。あわせて、人口減少や財政制約という現実がある中で、「なぜ今、能勢町に図書館が必要なのか」という根本的な意義を町民と共有し、深く理解するための対話の場として位置付ける。

【のせのセッションについて】

- ・「のせのセッション」は、旧能勢町立久佐々小学校の体育館「敬愛舎」を活用した“地域をつなぐ図書館づくりや、新しい図書館をみんなで創ろう”とするためのワークショップ等の活動名称である。
- ・図書館の自由に関する宣言や図書館の本来機能をふまえ、地域の魅力を発信し、人の交流を増やしたりしてまちを元気にするなど公共サービスの新しいかたちを担う。
- ・町民の方を始め、広くこの活動に関心をもって参加してもらえるようなロゴのコンセプトとして、丸みがあり親しみやすい書体を制作した。図書館のイメージの「本」をモチーフとしたイメージに、敬愛舎の丸窓モチーフを配し、その上に「のせのセッション」を乗せ（載せ）た。能勢内外に広がっていくというイメージで、四角から大きく広がった表現にしている。



① 「想い」をのせる対話（セッション）

本を借りたり読んだりするだけの場所ではなく、子どもから大人までが気軽に立ち寄り、学びや交流が生まれる「新しい図書館」をめざす。そのため、設備や機能の議論から入るのではなく、まず「能勢での過ごし方」や「町の将来」について語り合い、施設が果たすべき役割や意義を共有することを重視する。

② 「プロセスを見せる」こと

従来の行政主導による見えにくい計画策定から脱却し、SNS（Instagram 等）を活用して検討経緯

を常に情報発信している。これにより、時間的制約などでワークショップに直接参加できない30～40代の子育て世代や働く世代に対しても進捗を共有し、多様な意見を出してもらいやすい環境を整えている。完成までのプロセス（過程）を可視化し、変化していく様子を見せることで町民の関心を継続的に高め、図書館づくりに関わる「人のつながり」を広げていくことを意図している。

③ 「余白」を残した参加設計

「未完成なプロジェクトほど人は関わりやすい」という考え方を取り入れ、あえてコンセプトに余白を残す。これにより、町民が主体的に関わり、本棚づくりやイベント企画などを通じて、完成後も「図書館を育てる」感覚を持てるようにする。

④ 段階的なアプローチとテーマ設定

初期のワークショップでは、あえて「図書館の話をしない」という方針をとる。これは、人口減少や財政制約という町の現実を踏まえ、「なぜ今、図書館を整備するのか」という根本的な問いを町民と共有し、「図書館＝本の貸し借りの場」という固定観念を見直すためのプロセスである。

（２）ワークショップの概要

全3回のワークショップでは、段階を踏んで、「新しい図書館で実現したい素敵な情景」を描くための議論を深めた。

① 第1回ワークショップ（令和7年12月）「能勢での過ごし方を見つめ直そう」

これまでの暮らしを振り返り、地域の資源や課題を掘り起こした。参加者は「のせのセッションワーク本」を手に、能勢の好きな情景や改善したい情景を共有した。その中で、全世代にとっての「サードプレイス」としての期待が明確になった。

【第1回ワークショップ実施プログラム】

① アイスブレイク

「のせのセッションワーク本」をつくり自己紹介を行う。（能勢のどんなところが好き？）

② 新しい図書館づくりに関する事業説明

本事業の趣旨や経緯の説明。

③ ワーク1「所信表明をしよう」

「能勢にこんな図書館をつくりたい！」をのせのせ本に書き込む。

④ ワーク2「能勢での過ごし方を見つめ直そう」

能勢での過ごし方を見つめ直し、「人」「場所」「時間」のワークカードをつくる。

⑤ 全体共有

各グループの意見を発表する。



写真：ワークショップの様子

② 第2回ワークショップ（令和8年1月）「未来の能勢での過ごし方を想像しよう」

カードゲーム形式で「人・場所・時間」の要素を組み合わせ、偶発的な発想から「素敵な未来の情景」を描いた。この手法により、固定観念に縛られない柔軟なアイデアが生まれ、高齢者や移住者の抱える潜在的な課題への気づきも共有された。

【第2回ワークショップ実施プログラム】

① アイスブレイク

「のせのセッションワーク本」への書き込みを行います。（新しくできる図書館にはどんな本がほしい？）

② ワーク1「能勢での過ごし方を良くしよう『情景ビフォーアフター』」

「人」「場所」「時間」＋「情景（ネガティブ）」に対して、素敵な情景に変える方法を考える。

③ ワーク2「未来の能勢での過ごし方を想像しよう『素敵な未来の情景ゲーム』」

1人目は「人」カード、2人目は「場所」カード、3人目は「時間」カードを引き、4人目はその要素を想像して、能勢での素敵な未来の情景を発表する。

④ 全体共有

各グループの意見を発表する。



写真：ワークショップの様子

③ 第3回ワークショップ（令和8年2月）「能勢の未来の図書館を考えよう」

これまでの議論を具体化させ、描いた情景を新施設でどう実現するか、空間・サービス・運営の工夫を検討した。自分たちが出した情景から図書館の姿が浮かび上がるプロセスは、参加者の深い納得感へとつながった。

ワークショップでは、「人・場所・時間」を掛け合わせながら、本町における日常や未来の過ごし方を具体的な「情景」として描き出すことにより、単なる要望ではない、暮らしの質や価値観に根ざした意見が共有された。

特に、第2回では「情景ビフォーアフター」や「未来の情景ゲーム」を通じて、日常の課題を前向きな価値へと転換する視点が示され、第3回ではそれらの情景を図書館で実現するための具体的な空間・サービス・運営の工夫へと展開された。

これらの成果を単なるアイデアとして扱うのではなく、その背景にある生活実感や課題構造を読み解き、本構想の骨子へと翻訳する。

【ワークショップ実施プログラム】

① アイスブレイク

「のせのセッションワーク本」への書き込みを行う。（本を読む図書館以外にどんな機能が一緒になったらいい？）

② 事例紹介

本を読んだり借りたりするだけではない、多様な役割を担う、最近の図書館整備事例の紹介。

③ ワーク「新しい図書館で実現したい情景」

これまでのWSを通じて描かれた素敵な情景を図書館で実現するための方法を考えるワーク。

④ 全体共有

各グループの意見を発表・共有する。



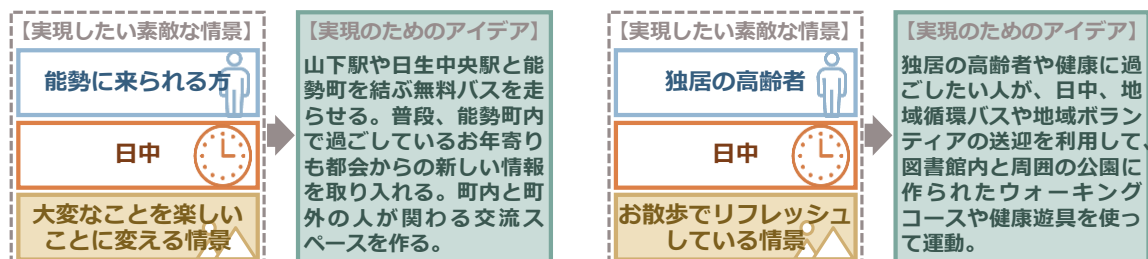
写真：ワークショップの様子

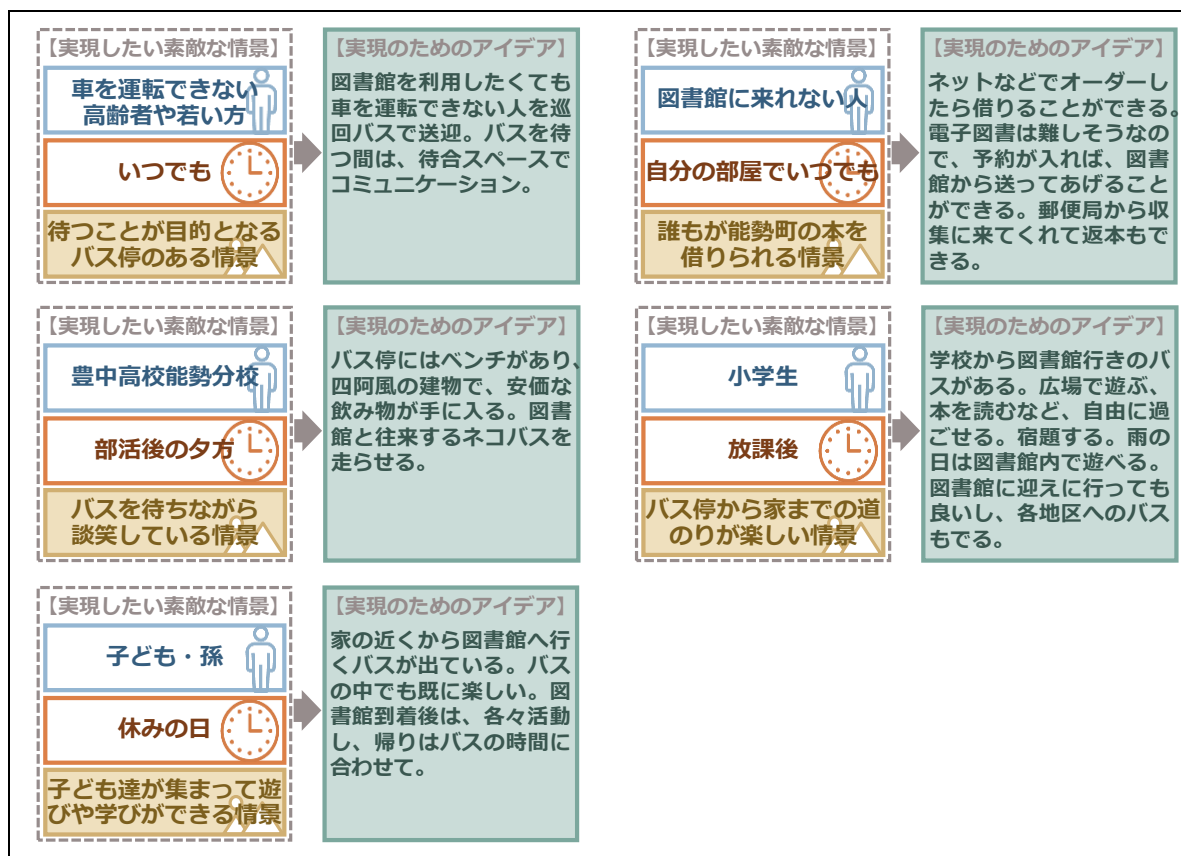
（３）ワークショップを通じて描かれた「新しい図書館で実現したい素敵な情景」

３回のワークショップを通じて、現在と未来の能勢での暮らしを見据えた「新しい図書館で実現したい素敵な情景」を描き、その実現方策を検討した。「素敵な情景」に込められた人物像や時間の過ごし方のイメージを手がかりとして、実現に必要な空間構成、サービス内容、運営上の工夫など、実現のためのアイデアについて具体的に整理した。

【交通の便・アクセス・図書館バス】

図書館の利用環境の向上に向け、山下駅や日生中央駅、町内各地区と図書館を結ぶバスの運行など、交通手段の充実が提案された。特に、自家用車を利用できない高齢者や子どもに配慮した送迎の仕組みの構築が求められている。また、隣接する広場の活用により、健康づくりの場や、子どもが読書や遊びを通じて滞在できる居場所としての機能の充実も期待されている。さらに、来館が困難な利用者に対応するため、本の配送や郵送による返却といったサービスの導入についても提案がなされた。



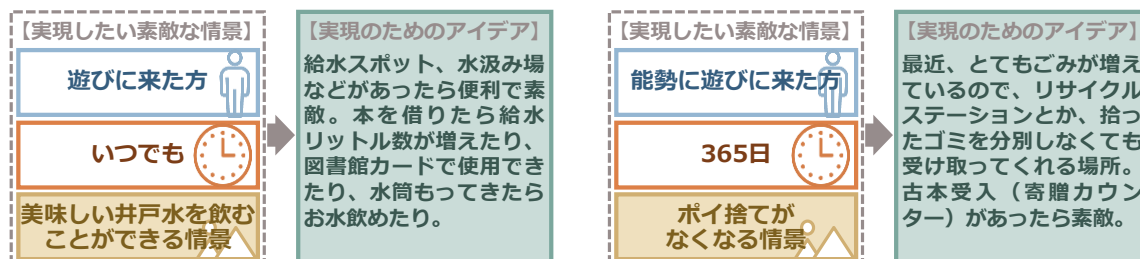


【町外に向けて・観光】

図書館を町外からの来訪者にも開かれた観光・交流の拠点として活用するアイデアが挙げられた。具体的には、無料で利用できる給水スポットや水汲み場の設置、リサイクルステーションや古本の寄贈カウンターの整備など、環境に配慮した取組みを通じて、気軽に立ち寄ることができる場とする提案が示された。

また、能勢の見どころや観光情報、関連書籍を紹介する展示スペースを設け、観光客に地域の魅力を発信するとともに、案内機能を担う人材による情報提供の場として活用することが期待されている。さらに、役場跡地に整備される広場と図書館を回遊性のある魅力的な動線で接続し、子どもから大人まで楽しめる空間とするアイデアも示された。

これらの取組みにより、来訪者が休憩や町民との交流を楽しめる場として機能させることで、「能勢にまた来たい」と感じてもらえる図書館の実現をめざすべきとの意見があった。

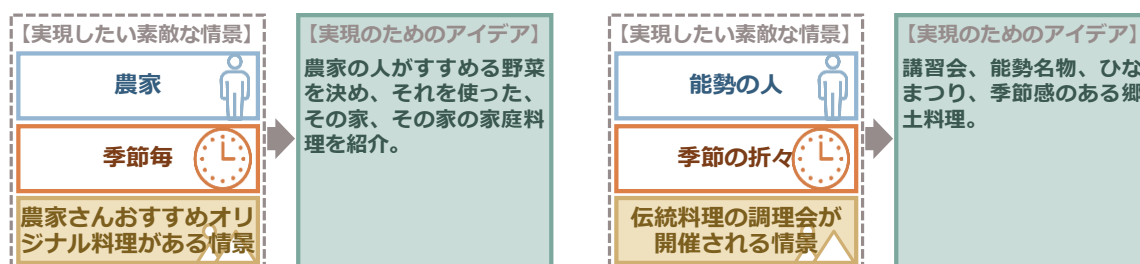




【能勢らしさ（食べ物・伝統・文化・自然）】

能勢の自然や文化、暮らしの魅力を体感できる図書館づくりに関する意見が挙げられた。具体的には、地元農家が勧める食材を用いた家庭料理の紹介や郷土料理の講習会の実施など、能勢ならではの食文化に触れられる取組みが提案された。また、規格外の農産物を活用し、子どもや職人と連携したスイーツづくりを通じて新たな特産品の創出を図るようなアイデアも示された。

さらに、亥の子をはじめとする地域の伝統行事の紹介・体験機会の創出や、読み聞かせ、伝統的な遊び、ものづくり体験などの定期的な実施により、町内外の人々が参加できる交流の場とすることが期待されている。加えて、大空間や階段を活用した季節展示や、大けやきやアオブズクをテーマとしたコーナーの設置など、能勢の自然や季節を感じられる空間づくりの必要性も示された。



【実現したい素敵な情景】 農家 学校帰り スイーツを作っている情景	【実現のためのアイデア】 道の駅に採った野菜、果実を納品し、規格外の物を持ち寄って学校帰りの子ども達を巻き込んでスイーツ作り。専門的な職人さんの手ほどきで本格的な能勢のスイーツを商品化。	【実現したい素敵な情景】 子どもたち 11月の亥の子の日 獅子舞で各家を回る情景	【実現のためのアイデア】 亥の子がなくなってしまった地区の子たちに、亥の子の日に図書館で獅子舞を披露。亥の子デーとして、亥の子についてのお話会や、亥の子餅の振る舞いなどもあったら楽しい。
【実現したい素敵な情景】 小学生 放課後 近所の方とふれあい、仲良くなる情景	【実現のためのアイデア】 平日夕方に図書館内で読み聞かせや（能勢の）伝統的な遊びを一緒に楽しめるイベントを定期的で開催する。誰でも参加可能。	【実現したい素敵な情景】 子どもから大人まで老若男女 10月のある日 朝から昼まで 地域の祭りを、楽しんでいる情景	【実現のためのアイデア】 町内の誰でも、観光客も参加して、毎月1～2回、能勢の伝統行事や伝統、ものづくりなどの体験イベントが開かれる。
【実現したい素敵な情景】 - - ひな人形やこいのぼりを飾る情景	【実現のためのアイデア】 季節を感じられる図書館、大空間、大階段に能勢特有の季節のものを展示する。	【実現したい素敵な情景】 大けやきに來られる仲間 - おしゃべりしている情景	【実現のためのアイデア】 大けやきの（アオブズク付き）モデルを囲み、けやきの歴史や、鳥の成長、習性などの本を置き、コーヒーを飲みながらおしゃべりしている。

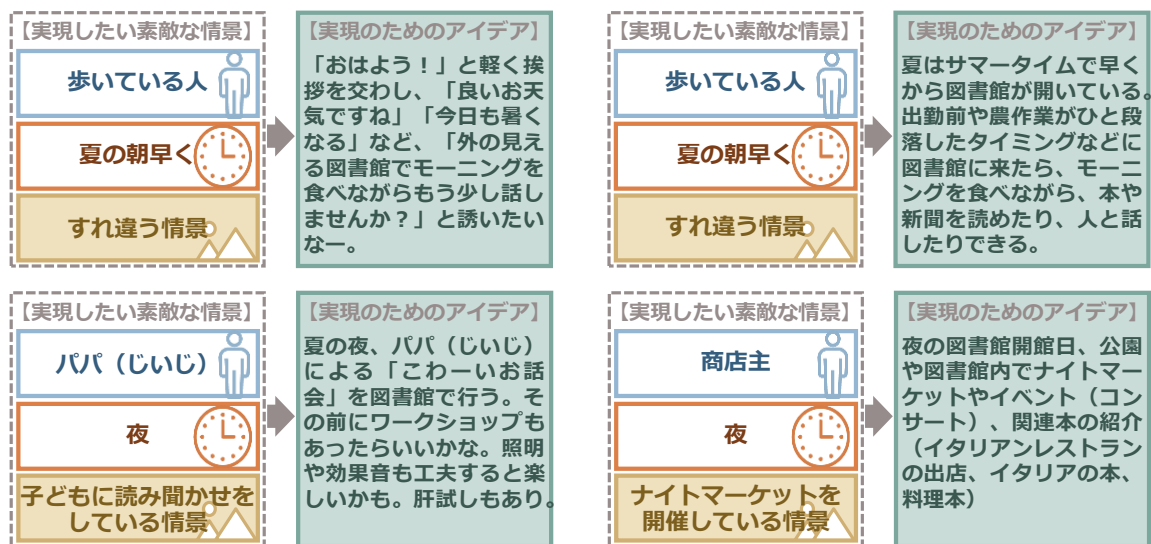
【イベント】

図書館の開館時間外や夜間の活用に関する提案が挙げられた。具体的には、読書会や焼き芋パーティーなど、本や交流を楽しむイベントの実施が示された。また、図書館周辺においてナイトマーケットを開催し、飲食やフリーマーケットを通じたにぎわいの創出を図るアイデアも提案された。

【実現したい素敵な情景】 パパ（本好きの人） 早朝もしくは深夜 試飲体験会を行っている情景	【実現のためのアイデア】 普段図書館で飲酒はできないと思うので、オープンする9時前まで（もしくは深夜）、お酒を飲みながら好きな本について語り合う。図書館への送迎バスも出る。	【実現したい素敵な情景】 小学生 クリスマス 友達を集めてパーティーをしている情景	【実現のためのアイデア】 クリスマスにまつわる本を展示⇒選んで読む（簡単な感想）⇒プレゼント。小学生だけでなく大人もOK。プレゼントは、ボランティアの手作りを募集。
【実現したい素敵な情景】 教育長 秋 子ども達と芋堀りイベントを行う情景	【実現のためのアイデア】 図書館に来ている方々に芋を配布。焼き芋パーティーのポスターを掲示して、図書館に来ている人をイベントに誘う。図書館×秋の味覚イベントを図書館職員や参加者とのコラボ企画を考える。	【実現したい素敵な情景】 店主 夜 ナイトマーケットを開催している情景	【実現のためのアイデア】 亥の子がなくなってしまった地区の子たちに、亥の子の日に図書館で獅子舞を披露。亥の子デーとして、亥の子についてのお話会や、亥の子餅の振る舞いなどもあったら楽しい。

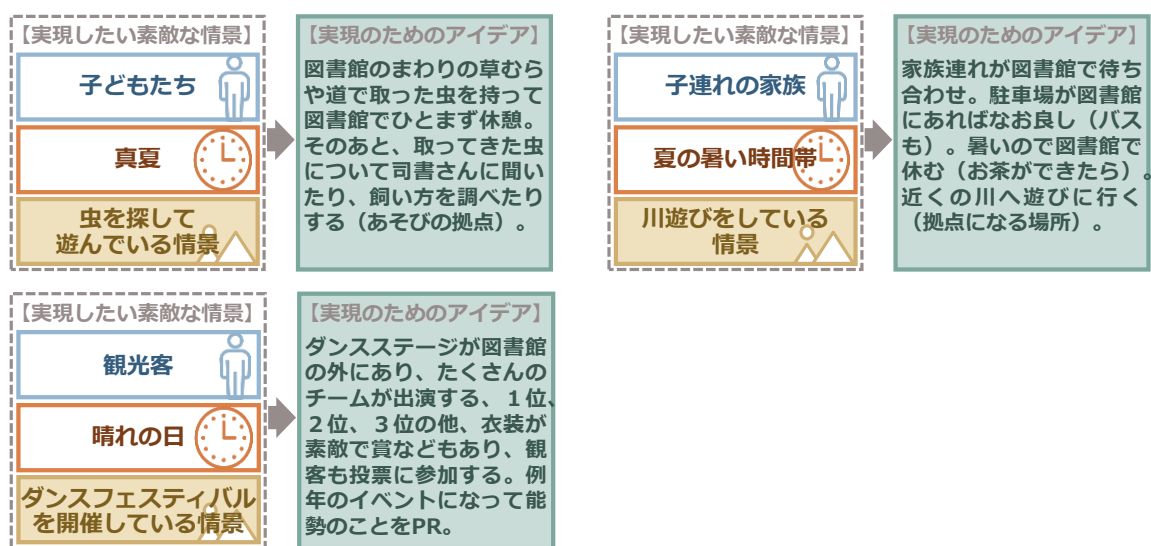
【日常・コミュニティ・集い・夜の図書館】

図書館を時間帯に応じて多様に楽しめる場とする提案が挙げられた。具体的には、夏季には早朝から開館し、モーニングとともに読書や会話を楽しめる場とするほか、夜間にはお話会やコンサート、マーケットなどのイベントを実施するアイデアが示された。



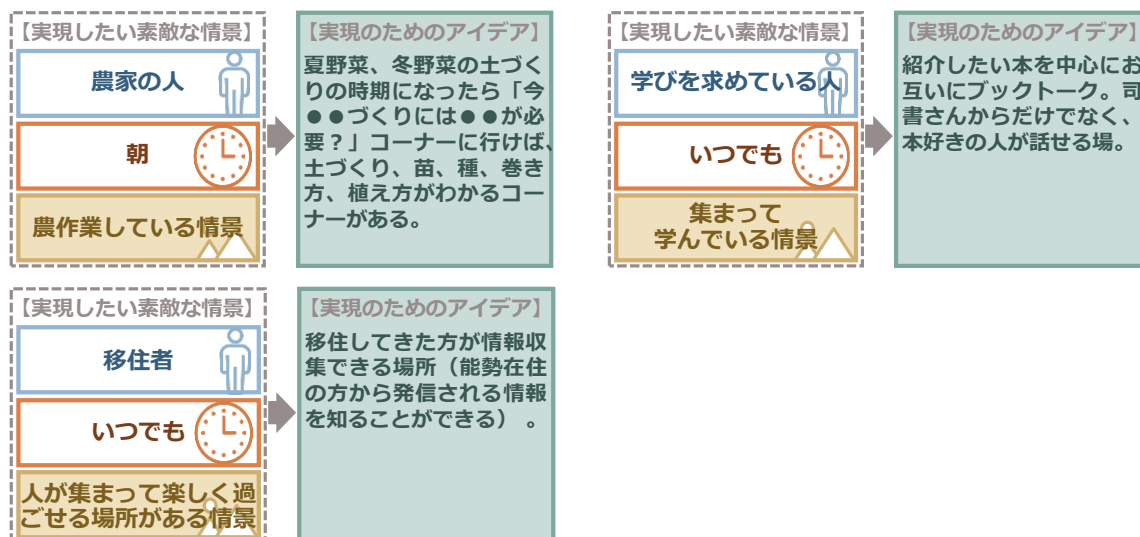
【あそびと交流の拠点】

図書館周辺の自然環境や広場を活用し、遊びや交流の拠点とする提案が挙げられた。具体的には、採集した昆虫を調べる学びの場や川遊びの拠点としての活用に加え、ダンスフェスティバルの開催など、町内外から人が集まるイベントの実施が提案された。



【情報ステーション】

図書館を地域の暮らしや学びを支える拠点とする提案が挙げられた。具体的には、農作業に役立つ資料を紹介するコーナーの設置に加え、読書愛好者によるブックトークの実施や、移住者が地域情報を得られる場としての機能付加が提案された。



（４）「情景」から読み取れる価値観と課題

ワークショップで描かれた「素敵な情景」には、単なる施設機能ではなく、本町における暮らしの理想像が表れている。

例えば、

- 「バス停での待ち時間が目的となる情景」
- 「放課後に子どもが安心して過ごせる場」
- 「観光客と町民が自然に交流する場」
- 「伝統行事や食文化を日常的に体験できる場」

といった意見は、いずれも「機能の要望」ではなく、「関係性のあり方」への期待を示すものである。これらを整理すると、以下のような潜在的ニーズが浮かび上がる。

- 「移動の不便さを超えて、人と人がつながる機会を求めている」
- 「日常の中で自然に交流が生まれる「居場所」を求めている」
- 「地域の魅力を外に伝え、外からの関わりを受け入れたい」
- 「文化や自然を「体験」として継承したい」

（５）ワークショップから導かれる本町の構造

ワークショップでの意見から導かれた本町の構造を整理する。

① 移動・アクセス

- ・高齢者や子どもなど、移動手段が限られる層の参加機会の制約
- ・「来られる人」と「来られない人」の分断
(例：図書館バス、送迎、バス停の拠点化)

② 日常の中での交流機会

- ・世代間の接点の不足
- ・偶発的な出会いや関係形成の機会の減少
(例：放課後の居場所、バス待ちの談笑、共通の挨拶)

③ 地域内外の関係性

- ・観光客と町民の接点の不足
- ・地域資源の発信不足
(例：観光情報の発信、交流スペース、案内機能)

④ 文化・記憶

- ・伝統行事や食文化の継承機会の減少
- ・地域の知恵が次世代に伝わりにくい状況
(例：郷土料理、伝統行事、ものづくり体験)

⑤ 自然と暮らし

- ・里山環境と日常生活の距離
- ・自然を体験として活かす機会の不足
(例：農体験、自然遊び、広場との連携)

⑥ 時間と居場所

- ・放課後・夜間などの居場所不足
- ・多様な生活時間に対応できない施設環境
(例：放課後利用、夜間利用、滞在空間)

4 ステークホルダーの声と社会ニーズの構造化

本構想の策定に向けて、のせのセッションの取組みに加え、専門家や実務者、地域団体等から幅広く意見を聴取し、施設に求められる社会ニーズの構造化を図った。

(1) 専門家・クリエイターによる先進的知見

コミュニティデザインや建築、情報編集の専門家からは、既存ストックの活用方法や町民参画のあり方について、以下の指摘がなされた。

① 「屋根のある公園」と余白の設計

本町には天候に関わらず一日滞在できる場所が少ないため、都市近郊の特性を活かした「屋根のある公園」のような施設が求められる。また、「未完成なプロジェクトほど人が関わりやすい」という視点から、あえてコンセプトに余白を残し、町民が本棚作りやイベント企画へ継続的に関与できる仕組みづくりが提案された。

② 敬愛舎のポテンシャルと課題

改修対象となる敬愛舎の建築的価値が高く評価される一方で、大空間ゆえの空調効率や音響面での課題が指摘された。これに対し、音の響きを逆手に取った活用など、既存要素を工夫して乗り越えるアプローチが提案されている。

③ 結節点（ハブ）としての機能

図書館は単に本を収蔵する場所ではなく、地域の情報や多様な人材（ステークホルダー）を収集・活用し、適切な相談先へと誘導できる「ハブ（つなぎ手）」としての役割が強く期待されている。

(2) 教育・図書館実務者による専門的視点

学校教育との連携や、専門職によるサービスの質向上について、具体的な要望が寄せられた。

① 教育機関との連携と相互補完

町立図書館と義務教育学校の図書室が担う役割を明確化し、図書システムの共有化を含めた包括的な連携体制の構築が不可欠である。

② 多様化する読書ニーズへの対応と配架の工夫

読書習慣のない層に向けた「本の処方箋コーナー」の設置など、読書のきっかけづくりが提案された。また、児童書と専門書をあえて同列に配架するなど、多世代の知的好奇心を広げる工夫が求められている。

③ 乳幼児期からの読書環境整備

共働き世帯における家庭内での読み聞かせの負担増を踏まえ、就学前児童への読み聞かせ支援や児童書の充実、さらには児童サービスに長けた専門人材（司書）の配置の重要性が強調された。

(3) 地域・福祉・健康の視点

高齢者支援、健康増進、学生の居場所など、生活に密着した地域課題を解決する場としての期待が

大きい。

① サードプレイスの創出とアクセス環境の確保

学生の自習スペースや夜間利用への期待が高い。一方で、自動車を運転できない高齢者や子どもにとっての移動手段（バスやタクシー等）の確保が、施設利用の大前提として挙げられた。

② 健康増進と地域コミュニティ（地縁力）の活用

認知症やフレイル予防に繋がる「健康づくり」の要素を運営に取り入れ、大学等との連携や既存の地縁力を活かしたコミュニティ拠点の形成が期待されている。

③ ユニバーサルデザインの推進と情報アクセシビリティ

朗読ボランティア等の意見から、視覚・聴覚に障害のある方や高齢者のための「対面朗読室」の整備や、現施設が抱える段差等の課題を解消したバリアフリー動線の確保が強く望まれている。

（４）地域産業・青年部・移住者の視点

農業や商工業の活性化、さらには移住促進の装置としての役割についても議論が及んだ。

① 地域資源と利用者のマッチング機能

観光客と地元農家、あるいは自然環境の専門家をマッチングさせ、収穫体験や生きた知識の伝承へと繋げる空間としての活用が提案された。

② 魅力的な空間創出とプロモーション

若年層や移住者が誘い合わせて訪れたいようなカフェ機能の併設や、話題性のある空間づくり（ヨガ、マッサージ、地元農産物等の多様なコンテンツ・人材との連携）が重要視されている。

③ 地域資料（郷土資料）の収集とデジタルアーカイブ化

書物に残りにくい地域の伝承や民話などをデジタルアーカイブ化し、貴重な郷土資料として保存・整理・活用していくことへの期待が大きい。

（５）ステークホルダーが描く共通の図書館像

多様なステークホルダーの意見を統合すると、本施設は単なる「本の貸出所」を脱し、以下の４つの要素を兼ね備えた「多機能型コミュニティ拠点」であることが求められている。

- ・屋根のある公園：目的がなくても気軽に立ち寄れ、一日中快適に過ごせる居心地の良い空間。
- ・知の交流ハブ：専門職（司書等）が、人と情報、人と人をつなぐ結節点。
- ・世代を越えた居場所：学生の学習、高齢者の健康づくり、親子の憩いなど、あらゆる世代を包摂するサードプレイス。
- ・能勢の価値発信拠点：農業、自然、伝統文化といった地域資源を編集し、町内外へ広く発信する装置。

5 町の課題（ほころび）の整理

本町では、人口減少や高齢化の進行、社会構造の変化に伴い、これまで地域を支えてきた様々な関係性が弱まりつつある。これらの変化は、単なる人口や施設の問題にとどまらない、「つながりのほころび」として顕在化している。

以下にこうした課題を構造的に整理する。

① 人と人のほころび

かつて地域社会を支えてきた地縁的なつながりが弱まり、世代や属性を超えた交流の機会が減少している。特に、高齢者の孤立や子育て世代の孤立など、日常的な関係性の希薄化が課題となっている。

また、高齢化の進行により、地域における世代構成が大きく変化している一方で、世代間の接点が減少している。高齢者の知識や経験が次世代へ十分に継承されていない状況が見られる。

② 地域の内と外のほころび

地域資源や魅力が十分に外部へ発信されておらず、来訪者や移住希望者との関係構築も限定的である。また、地域内においても、情報や機会へのアクセスに差が生じている。

③ 過去と現在・未来のほころび

地域の歴史や文化、暮らしの知恵が継承されにくくなっており、地域の記憶が断片化しつつある。一方で、環境問題や持続可能性といった未来への課題に対する学びの機会も十分とは言えない。

④ 自然と暮らしのほころび

里山という豊かな自然環境を有しながらも、日常生活の中で自然と関わる機会が減少している。自然が身近な存在でありながら、学びや体験として十分に活用されていない。

⑤ 時間のほころび

早朝や夜間など、多様な時間帯に応じた居場所が不足しており、生活スタイルに応じた過ごし方が制約されている。日常の中で気軽に立ち寄り、滞在できる場所が限られている。

これらの分断は相互に関連しており、地域全体の活力や持続性に影響を及ぼしている。本構想では、これらの分断を再び結び直すことを出発点とする。

6 基本理念と基本方針

(1) 基本理念

本町では、人口減少や高齢化の進行に伴い、人と人、世代、地域の内外、過去と未来、自然と暮らし、そして時間の過ごし方といった、これまで地域を支えてきた多様な関係性がほころびつつある。

本施設は、これらのほころびを単に補うのではなく、相互に結び直し、新たな関係性を創出する拠点として位置付ける。

本施設は、従来の「本を借りる場所」という枠組みを超え、人と人をつなぎ、知と経験を循環させ、地域内外の交流を生み出す「知と交流のハブ」として機能するものである。

また、敬愛舎を活用する本プロジェクトは、地域の記憶を継承しながら新たな価値を創出する取り組みであり、本町の将来像である「縁をつなぐ開かれたまち」の実現に向けた具体的な実践の場でもある。

旧体育館のコンバージョンにあたっては、耐荷重の補強や空調効率の確保といった技術的課題を解決するだけでなく、既存の構造が有する大空間・スケール感を最大限に活用する。

既存建築物の制約を逆手に取り、新築施設では代替し得ない独自の空間構成（建築的魅力）を創出することで、来館者の知的好奇心を刺激し、滞在そのものが目的となるような拠点形成を図る。これにより、公共施設の長寿命化と魅力向上を両立させるモデルケースをめざす。

これは、町民が「すでにある地域の価値」を再発見し、本町のアイデンティティを体現する拠点として、誇りを持って次世代へつなぐという、本町がめざすべきまちづくりの姿勢を象徴するものである。

以上を踏まえ、本構想の基本理念を「つなぐ図書館」と定める。

ここでいう「つなぐ」とは、単なる機能的な連携を意味するものではなく、ほころびつつある関係を再編し、人と地域の未来を編み直す行為そのものを指す。

【基本理念】

つなぐ図書館

(2) 基本方針

基本理念「つなぐ図書館」を具体化するため、本町の現状や課題、のせのセッションワークショップで示された意見を踏まえ、「人」「地域」「時間」「自然」「歴史・文化」といった多様なつながりを再構築する視点から、以下の5つの基本方針を設定する。これらの方針に基づき、空間整備と運営、サービスを一体的に展開することで、単なる図書館にとどまらない、人と人、人と地域、地域の内外を結び直す「まちの装置」として機能することをめざす。

また、シビックゾーンにおける他施設や広場との連携を図りながら、本町における交流・学び・創造の中核拠点として、持続可能な地域社会の形成に寄与するものである。

① 地域の人と人をつなぐ

地域コミュニティの希薄化が進む中、多世代が自然に集い、関係性を育むことができる「居場所」としての機能を強化する。そのため、子どもから高齢者までが安心して滞在できる空間を整備するとともに、日常的な交流や活動が生まれる環境を創出する。

【町のほころび】

- ・地縁の希薄化や通勤・通学による町外流出、ライフスタイルの多様化により、世代や属性を超えた交流の機会や、日常的に顔を合わせる場が消失し、地縁に基づかない新たな町民同士の接点が失われている。

【つなぐ方向】

- ・多世代が自然に交わり、関係性を育むことができる「日常の居場所」を形成する。

【具体的取組】

- ・カフェや談話スペース、コワーキング機能等を備えた滞在型空間の整備
- ・子育て世代、高齢者、学生等それぞれのニーズに応じたゾーニング
- ・地域活動団体やボランティアの拠点機能（登録・マッチング）
- ・司書等による利用者同士の交流を促すコーディネート機能
- ・移動図書館や出張サービス等による来館困難者への対応

② 地域の中と外をつなぐ

地域内外の人や情報が交差する拠点として、能勢の魅力を発信するとともに、多様な主体との関係性を構築する。また、地域課題の解決に資する情報や人材をつなぐ「ハブ」としての役割を担う。

【町のほころび】

- ・地域の魅力や資源が十分に発信されず、外部との関係構築が限定的である。

【つなぐ方向】

- ・地域内外の人や情報が交差する「開かれた拠点」を形成する。

【具体的取組】

- ・観光、移住、農業、仕事等に関するワンストップ情報提供
- ・電子書籍やデジタルアーカイブ等の導入による遠隔利用の推進
- ・地域事業者や移住者等と連携したイベント・講座の開催
- ・ワーケーションやテレワーク利用者の受け入れ環境の整備
- ・学校や大学、外部機関との連携による知の交流の促進

③ 過去と未来をつなぐ

能勢町に受け継がれてきた歴史・文化・暮らしの知恵を次世代へ継承するとともに、敬愛舎の再生を通じて、「すでにある地域の資源」に光を当てることで、未来に向けた新たな学びや創造を生み出す、本町の持続可能な未来を共創する拠点となることをめざす。

【町のほころび】

- ・地域文化や記憶の継承が弱まり、未来への学びとの接続も十分でない。

【つなぐ方向】

- ・地域の記憶を継承しつつ、新たな知と創造を生み出す。

【具体的取組】

- ・地域資料（歴史・民俗・自然等）の収集・保存・展示の充実
- ・デジタルアーカイブ化による記録と継承
- ・子どもや若者が参加する聞き書きや記録活動の実施
- ・環境問題や SDGs に関する展示・ワークショップの展開
- ・創造的活動を支えるスペース（メーカースペース等）の導入

④ 能勢の自然とつなぐ

山という地域特性を活かし、自然と学び、暮らしが一体となった体験を提供する拠点とする。図書館内での学びを地域全体へと広げることで、「まち全体が学びの場」となる環境を創出する。

【町のほころび】

- ・里山環境を有しながらも、日常生活との接点が弱まっている。

【つなぐ方向】

- ・自然と暮らしが一体となる学びの場を形成する。

【具体的取組】

- ・図書館と屋外空間（広場・里山）を連続させる空間構成
- ・フィールドミュージアムとしての拠点化
- ・農業体験や森林体験等の自然体験プログラムとの連携
- ・自然、食、エネルギーに関する展示と実践活動
- ・光や風、素材等を活かした自然を感じる空間デザイン

⑤ 1日の時間をつなぐ

多様なライフスタイルに対応し、朝から夜まで様々な過ごし方ができる滞在型施設としての機能を強化する。日常利用と非日常的な体験の双方を提供することで、暮らしに寄り添う図書館をめざす。

【町のほころび】

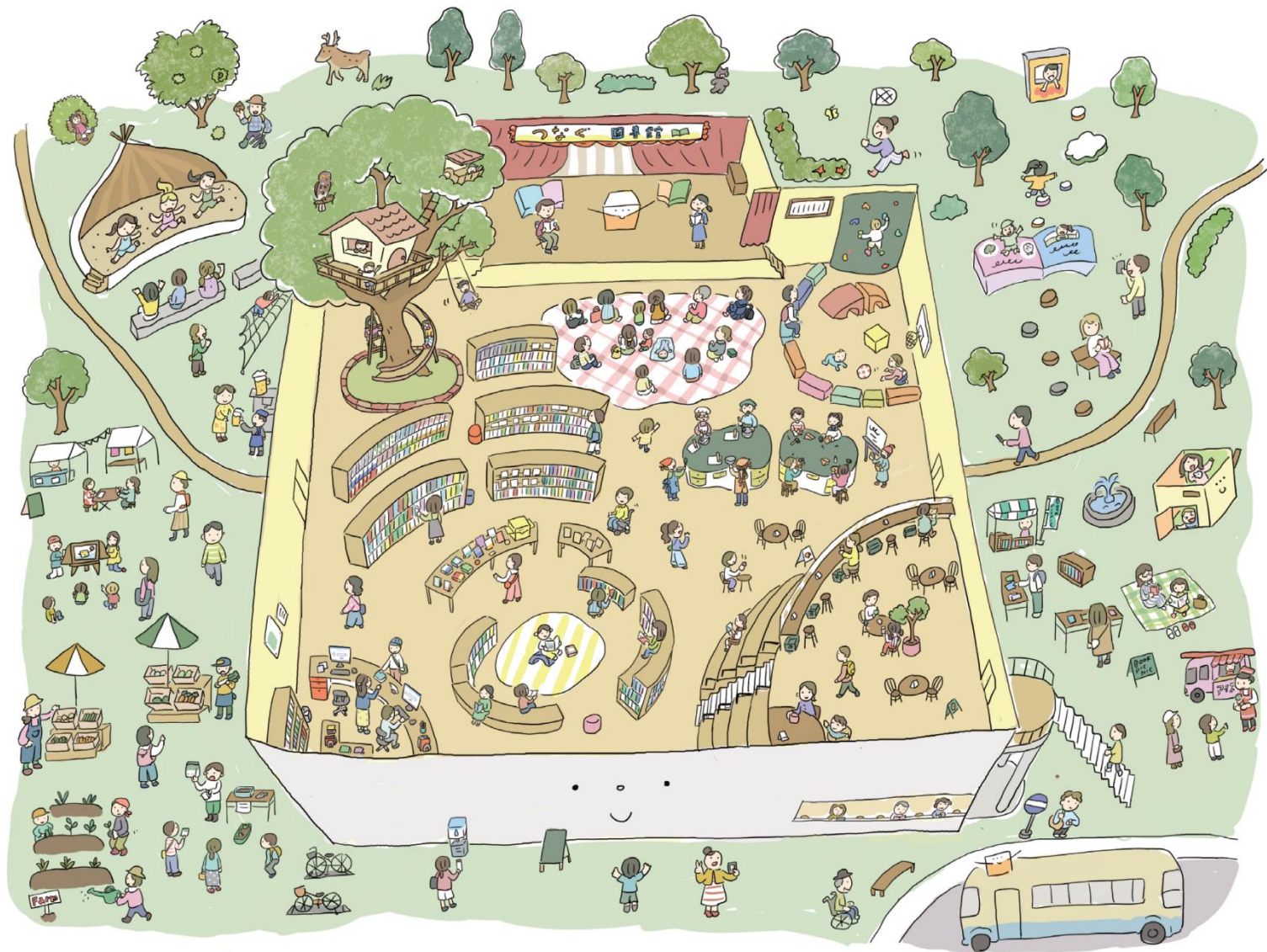
- ・多様な生活時間に対応する居場所が不足している。

【つなぐ方向】

- ・朝から夜まで多様な過ごし方を受け止める場とする。

【具体的取組】

- ・朝・昼・夜それぞれの利用シーンに応じた空間運用
- ・学習、仕事、交流、イベント等の時間帯別プログラムの実施
- ・無人利用やセルフ貸出等の ICT を活用した運営
- ・飲食や長時間滞在を前提とした居心地の良い環境整備
- ・ナイトイベント等による新たな利用機会の創出



図：つなぐ図書館のイメージイラスト

7 今後の進め方

本基本構想は、新たな生涯学習センター（図書館）の整備に向けた第一歩であり、完成がゴールではなく、構想策定から開館、そして開館後の運営に至るまでのプロセスそのものを、町民とともに歩む「まちづくりの実践」として位置づける。

（１）事業スケジュール

本構想の策定後、基本計画、設計、工事の各段階において、適切な進捗管理と情報発信を行い、令和 11 年の開館をめざすものとする。

表：事業スケジュール

年度	内容
令和 8 年度	基本計画
令和 8 ～ 9 年度	基本設計・実施設計
令和 10 年度	改修工事
令和 11 年度	施設オープン

（２）「のせのセッション」の継続的实施

構想策定のプロセスにおいて醸成された町民の関心と当事者意識を途絶えさせることなく、開館まで「のせのセッション」を継続して実施する。各フェーズに応じてテーマを設定し、ハード（施設整備）とソフト（運営）の両面を町民とともに磨き上げる。

① 基本計画フェーズ：情景の具体化と検証

基本構想で描かれた「能勢らしい情景」が、実際の敬愛舎という空間においてどのように実現できるのか、機能配置や動線などを検証する。

② 基本設計・実施設計フェーズ：空間デザインと使い方の検討

什器、特定のコーナー（子育て、コワーキング、カフェ等）のしつらえ、具体的な過ごし方など、より細やかな空間の質やデザインについての対話を深める。

③ 建設工事段階：運営体制と持続的な関わり方の構築

開館後のサポーター組織のあり方や、町民による企画・運営への参画方法、施設の愛着を育む仕掛けなど、ハードの完成を待たずに「自分たちで使いこなすための仕組み」を検討する。

（３）検討プロセスの可視化と持続的な利用環境の醸成

事業の透明性を確保するとともに、本施設の将来的な担い手や利用者を段階的に育成するため、以下の取り組みを推進する。

① 情報発信による参画基盤の拡大

SNS 等のデジタル媒体を効果的に活用し、検討過程や意思決定の背景を適時発信する。これによ

り、ワークショップ等の対面活動への参加が困難な現役世代等に対しても、事業への関心と理解を促し、施設を支える多様な主体の参画基盤を継続的に拡大させる。

② 試行的な活用を通じた利用者の育成

施設整備と並行して、策定中の構想を敬愛舎において体験・試行できる機会を創出する。開館前の段階から、町民が施設の活用方法を主体的に検討・実践するプロセスを組み込むことで、施設を共に育てる意識を醸成する。

③ 自律的な拠点形成への寄与

これらの取り組みを通じて、開館時において既に利用者の活動やコミュニティが形成されている状態の創出をめざす。これにより、供用開始直後からの円滑な施設運営を実現するとともに、町民による自律的な活用を促進し、持続可能な文化拠点の形成を図る。